

斑点米カメムシ類情報第2号

令和8年7月15日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病虫害防除室

水田内での発生量は平年並 ほ場での発生に注意し、防除しましょう

1 発生状況

7月上旬の本田のすくい取り調査（45地点90ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が0.90頭（平年1.17頭、前年2.26頭）で、平年並の状況でした。また、畦畔雑草のすくい取り調査（42地点81ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が7.38頭（平年17.48頭、前年25.50頭）で、少ない状況でした（表1）。斑点米産出能力の高い大型カメムシのミナミアオカメムシは、本田及び畦畔すくい取り調査のいずれも、やや多い状況でした。

県内5地点の予察灯における誘殺数（5月から7月第1半旬または第2半旬までの合計）は、大口町と弥富市でやや多く、西尾市、豊川市、長久手市でやや少ない～少ない状況でした（図1）。特に、ミナミアオカメムシは大口町、弥富市、西尾市、長久手市で多い～やや多い状況で、注意が必要です（図2）。

イネカメムシについては、地域やほ場によって発生状況が異なり、県内の一部ほ場で発生が確認されています。ほ場の発生状況に注意しましょう。

表1 斑点米カメムシ類の7月上旬調査結果（1ほ場あたりの平均捕獲虫数）

種類	本田すくい取り調査			畦畔すくい取り調査		
	発生量	本年	平年	発生量	本年	平年
ホソハリカメムシ	やや多	0.13	0.11	並	0.48	0.57
クモヘリカメムシ	やや少	0.17	0.34	やや少	0.04	0.40
シラホシカメムシ類	並	0.06	0.05	やや多	0.73	0.26
イネカメムシ	やや少	0.00	0.11	並	0.02	0.04
カスミカメ類	並	0.36	0.51	少	5.96	15.97
ホソナガカメムシ類	多	0.11	0.02	並	0.06	0.20
ミナミアオカメムシ	やや多	0.08	0.03	やや多	0.09	0.04
合計	並	0.90	1.17	少	7.38	17.48

（平年：平成28年～令和7年の平均値）

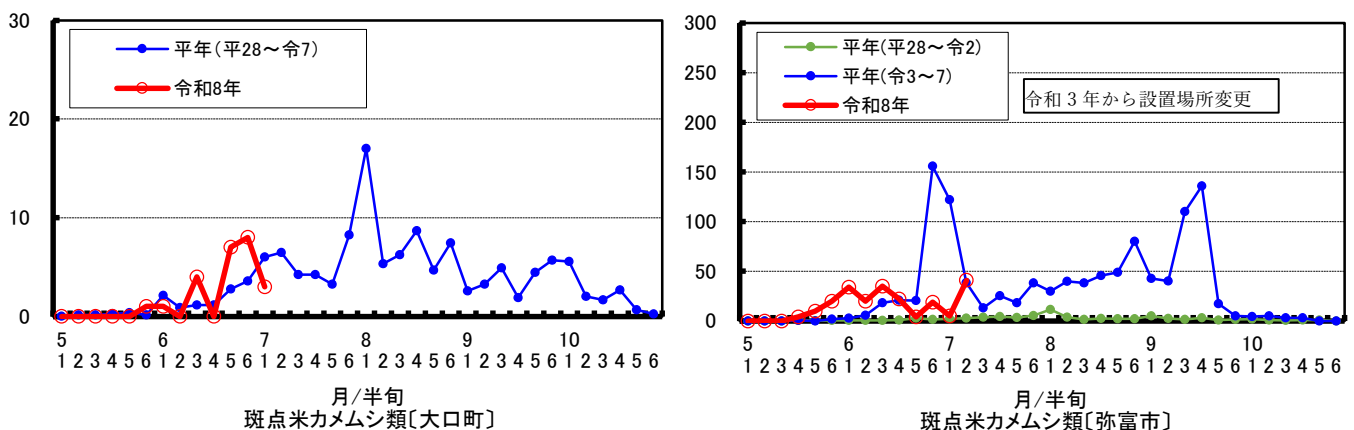


図1 予察灯における斑点米カメムシ類の誘殺状況（単位：頭）

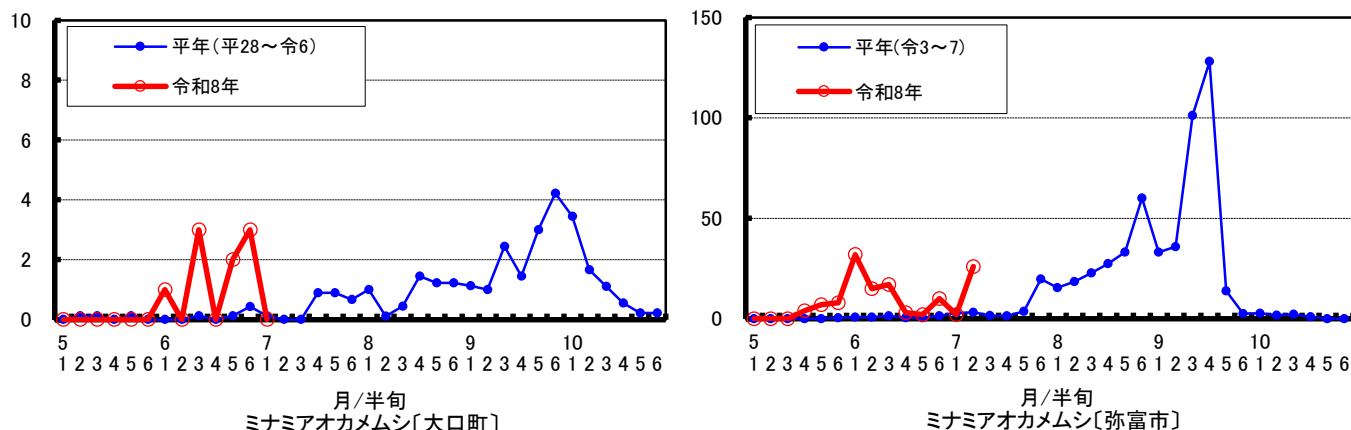


図2 予察灯におけるミナミアオカメムシの誘殺状況（単位：頭）

2 防除対策

- (1) イネカメムシ対策として出穂期（※）に薬剤防除する。また、イネカメムシ及び他の斑点米カメムシ類の対策として出穂期防除の7日から14日後頃（イネカメムシの発生が多い場合は7日から10日後）に追加で薬剤防除する。

※出穂期：ほ場全体の4～5割の茎から穂の先端が出た日

- (2) イネカメムシに対する薬剤は表2のとおり、水溶剤、液剤、フロアブル剤等が効果的である。なお、特定の農薬の連用を続けると、イネカメムシに対する農薬の感受性が低下する恐れがある。1回目防除（出穂期）と2回目防除（追加防除）の薬剤のIRACコードが異なるように薬剤を選定する。
- (3) 一部の地域ではエチプロール水和剤（商品名：キラップフロアブル）でイネカメムシに対する感受性が低下している事例が生じていることから、防除薬剤の選定については地域の指導機関等に相談する。
- (4) 出穂2～3週間前までに、斑点米カメムシ類の発生源となる水田畦畔のイネ科雑草の除草を実施する。ただし、出穂直前の除草は本田にカメムシを追い込むおそれがあるため注意する。
- (5) 水田内で穂をつけたヒエ類及びイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の発生を助長するので除去する。

表2 稲の斑点米カメムシ類（イネカメムシ）に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
スタークル／アルバリン顆粒水溶剤	収穫7日前まで	3回以内	4 A
スタークル液剤10			
エクシードフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4 C
キラップフロアブル（注）	収穫14日前まで	2回以内	2 B

（注）キラップフロアブルは本県一部地域でイネカメムシに対する感受性低下を確認しているため、感受性低下を確認している地域では使用を控える。（2（2）参照）

成分ごとの総使用回数に注意する。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、https://www.croplifejapan.org/assets/file/labo/mechanism/2025/mechanism_irac03.pdf を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。